これは，結氷日の前日に，西高東低の気圧配置になる前の低気圧が通過するために風が強くなり，当日は高気圧に覆われ，雲の少ない放射冷却の大きな日に結氷するということを表している。

また，最近（20世紀後半）の方が，昔（20世紀前半）よりも更に気温が低下しないと結氷・御神渡りがおこらないという傾向が見られた。これは，結氷については，諏訪測候所によって，明確な結氷日の定義が決められ，その基準が厳しくなったことが挙げられる。また，最近の湖の変化（湖盆の形態の変化・温泉の湧出量の増加・湖岸の変化など）によって，氷がはりにくくなってきたことも考えられる。この，湖岸の形態の変化というのは，昔はアシがあった岸辺が，今ではコンクリートで固められてしまったということであり，これによって波の抑制や氷の固定作用がなくなってしまった。そしてこれは御神渡りにも影響を与えており，岸に氷が固定できなくなってしまったことにより，氷の力が岸の外に逃げてしまい，氷の膨張時には氷は岸にせり上がって御神渡りとしては現われにくくなってしまった。これが，御神渡りの形成時の最近の気温低下を引き起こしている原因と思われる。

また，諏訪湖の結氷・御神渡りの記録は藤原・荒川によって１つの連続的なデータとしてまとめられたが，このうち1892～1923年の御神渡り日は拝観日の間違いであることが分かった。1924～1944年の御神渡り日と気象データとの関係から，1898～1923年の御神渡り日の推定を行った。

現代作家の描いた世界：村上春樹と彼の作品を事例として

伊　藤　直　美

村上春樹の一連の８作品を分析し，そこで描かれる「場所」について検討した。個々の「場所」を検討した結果，「場所」を含む「世界」について次の結論を得た。

初期二作品とそれ以降の作品とでは明らかにその作品世界のスケール及び対比される世界が異なるように感じられる。

しかし，初期二作品では，主人公は自分が育った場所を，すでに過ぎ去った過去の場所だと認識している。そして，『ノルウェイの森』や『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』において，その時間の経過の認識こそが，村上春樹の作品の中では死に結びついている。

例えば，「死んでしまった人は生き残った人の記憶の中にしか生きない。しかしその記憶は時間の中でどんどん抹殺されていく。」のである。

村上春樹はこの８作品でさまざまな角度から生と死を描き続けていると考えられる。

江戸時代末期の横須賀における天候の変動と農作業

越　智　由美江

測器による観測データが得られない歴史時代の気候の復元には，各種の日記や災害誌の記録が用いられる。現在，歴史時代の気候を復元する研究は，複数地点の記録をもとに天候の空間的分布を把握し天候の推移や季節変化を論じるものが主となっており，天候の推移と人間の活動との関わりについて論じられているものは見当らない。

そこで本研究では，現在の神奈川県横須賀市太田和の記録である『相州三浦郡大田和村　浅葉家文書　浜浅葉日記』を利用し，天候の推移と農作業との関わりを考察する。まず，日々の天候を抜き出し天候ダイアグラムを作成した。この天候ダイアグラムから降水日数・降雪率の算出，“梅雨”期間の推定を行ない，天候の変化をみた。降水日数は現代の横浜の値とほぼ同じであったが，降雪時期は当時の方が長いという傾向があった。

また“梅雨”期間は日記期間中では1858年以降遅くなるようである。これを詳しくみるために1857年迄と1858年以降とに分けて月別降水日数をみると，後半には多雨期間が後退する傾向がみられることがわかった。

次に，代表的な農作業として田植，稲かり，わたまき，わた取をあげ，日記中のこれらの記録から作業日の移動をみることにした。その結果，田植，わたまきともに入梅日以降に行なわれることがほとんどであり，特に田植については入梅日・多雨期間が遅くなる傾向のみられる1858年以降，これらとともに遅くなる傾向がみられることがわかった。なお，田植と稲かり，わたまきとわた取との間の日数，天候は年によるばらつきが多く，特記するべき傾向はみられなかった。

さらに，田植，わたまき作業の10日，30日，60日，90日前までの天候を調べると，わたまきの場合は10日前の降水日数が5日以下であるという以上の関係はみられなかったが，田植えの場合には作業開始前30日間の天候がほぼ一定しているということがわかった。

稲と綿の品種や育成については今後歴史や農学での研究が待たれるが，当時の農作業の記録と天候の間なんらかの関係があることは間違いないようである。特に田植の開始日は多雨期間の推移とよく対応し，さらに作業前の天候がほぼ一定していることから，天候との関係が深いといえるであろう。

都市高齢者の居住環境評価に関する考察

小　林　敬　子

日本において，高齢化社会は今後もますます進んで行くと考えられている。そのような中で高齢者にとって住みよい環境をつくることが急務となっている。高齢者関連の既存研究は，高齢者の生活構造や地域集団との関わりといった観点でなされており，実際のまちづくりに生かせるような環境に対する評価に関する研究は行われていない。そこで，本研究では，都市に居住する高齢者の居住環境評価を通して，次の2点を明らかにすることを目的とする。まず1点は，満足，不満の度合いから，都市環境に居住することの高齢者にとっての利点・問題点を考察する。2点めは，環境の主観的な認識を多次元尺度構成法（MDS）分析することによって，「地区像」を明らかにする。

対象地域は東京都文京区の商業地域又は商住混在の地域が大部分をなす本郷地区と，第一種住居専用地域が大部分をなす小日向地区とする。住宅地として発展して来た文京区であるが，現在は都心業務地が進出しており，性格が異なってきている。このような状況において，文京区のなかでも都心業務地域の進出が著しい地区と住宅地としての性格が残っている地区とを取り上げた。

文京区には，人口の減少，高齢者世帯の増加，業務・商業地の進行などの傾向がみられる。高齢者人口が増加しているにもかかわらず若年人口が減少し，昼間人口が減少しているということは，地域の空洞化の恐れがある。また，土地利用状況からは，業務・商業化の進行がうかがえる。従来の住宅地としての環境の性質が変化している。高齢者のみの世帯が増加していても，このような状況においては高齢者を地域で援護するといったことが行われにくくなってきているということが言えるであろう。

居住環境評価データを概観すると，小日向地区の特徴は，「道路」と「避難場所」についての満足度が極端に低くなっていることと，「日照」「町並み」「静けさ」の住居関連要素がすべて満足度が高くなっていることである。本郷地区の特徴は，極端に満足度が低いものは無いことと，「バス」「病院」「建物」という行動関連要素の満足度が高くなっていることと，「静けさ」「日照」「避難場所」が低くなっていることである。

高齢者の都市居住について2地区とも共通していえることは高齢者にとって，避難場所に対する不満が大いにあるということである。防災の観点からもさらなる整備が求められる。また整備の面だけでなく，普段から災害時はどのように対処すればよいのかを提示しておくことが必要と考えら